

みやぎがくいんようちえんだより（2016年3月号）

子どもの楽園

園長 平 川 新

日本が開国したあとの1859年に、イギリス初代駐日総領事として来日したオールコックは、いたるところで子どもたちがわいわい騒いでいる様子を見て、日本は「子どもの楽園」だと書いています（『大君の都』）。1877年に来日し東京帝国大学の教授に就任したモースは縄文時代の大森貝塚を発見したことで知られますが、彼の滞在日記『日本その日その日』にも、日本は「子どもの天国」だとあります。

とはいえ、子どもたちが一日中、外で遊んでいるから「楽園」だとか「天国」だと言っているわけではありません。幕末に来日したあるオランダ人は、「子どもがどんなにヤンチャでも、大人がこれを叱ったり懲らしめている様子を見たことがない」と書いていました。叱っているところが彼の目にとまらなかっただけで、子どもを叱る親はもちろんいたでしょう。これより300年ほど前の戦国時代に来日した宣教師ルイス・フロイスの記事も、なるほどなあと思わせます。

「われわれの間では、ふつうムチで打って息子を懲罰する。日本ではそういうことは滅多におこなわれない。ただ言葉によって譴責するだけである」（『日欧文化比較』）。

小さいころ、何度かお尻をたたかれた記憶はありますが、たしかに日本人の親がムチでたたいたという話はあまり聞いたことがありません（日本に生まれてよかった！）。あるオランダ人は、「日本の親たちはその幼児を非常に愛撫し、その愛情は身分の高下を問わず、どの家庭にもみなぎっている」と述べています。子どもに愛情を注ぐのは洋の東西を問わず変わりませんが、子育てや愛情表現は、お国によってかなり違うようです。それが伝統や習慣ということでしょう。でも外国人には「楽園」や「天国」に見えたということですから、日本の子育てのあり方は、多くの子どもにとっては幸せなことだったのかもしれない。

宮城学院の子ども園は、キリスト教の隣人愛にもとづきながら、子どもたちどうしが思いやりをもった関係になるように、そして神様や親や多くの大人の愛に包まれて生きていることを感じるようになる人間になるように、との理念をもって教育にあたっています。

年長組の子どもたちは、いよいよこの3月で卒園ですね。おめでとうございます。4月から年長組と年中組になる子どもたちは、11月から森に包まれた新しい園舎での生活が始まります。教職員は保護者の方々と一体となって、これまでよりもさらによりよい「子どもの楽園」「子どもの天国」となるよう努力いたします。ご協力のほど、よろしく願い申し上げます。